井上頼文教授と日本考古学

――伊勢国古代遺跡研究の諸業績――

藤井直正

一　はしがき

昭和五十五年四月、わが大手前女子大学に「井上氏旧蔵資料」が寄託されることになった。それは、幕末から明治にかけて、国学者として知られた井上頼囶（よりくに）にはじまり、その嗣子であり、父の後を承けて国学・国史の研究を進めると共に、神宮皇学館・神宮祢宜職をつとめられた井上頼文（よりふみ）、さらに民俗学者として活躍され、『京都古習志』『伊勢信仰と民俗』等、多くの著作をのこされた井上頼壽（よりひさ）に至るまでの、三代にわたって収集された各種の資料である。その内容は、典籍・古文書・書跡・絵図・拓本・摺本・民俗資料・考古資料等のほか、研究記録・日記・書簡・写真に及ぶまで多種多様で、各分野の研究に役立つ重要な資料である。

この「井上氏旧蔵資料」については、昭和五十五年十一月、大学に図書館棟（健学院）が落成した機会に一部が展示され[1]、以後現在に至るまで同館三階の研究資料収蔵庫に架蔵されている。また資料の整理は、本学史学研究所の事業として、井上家と回縁に当たる大手前女子短期大学の佐藤直市教授（史学研究所参与）によって、単念に進められて来たが、このほどほぼ終了した。資料目録の作成には、佐藤教授の指導の下に松村かよさん（旧姓花岡・史学科十三期生）が従事し、これも原稿が完成している。

このうち、考古資料としては、量は多くはないが、縄文・弥生時代の石器・土器、古墳時代の土器・玉類、さらに奈良時代から江戸時代に及ぶ屋瓦等がある。「井上氏旧蔵資料」の中には、『遺物一覧』と題する冊子二冊と、井上頼壽が作成した『井上家蔵品目録―考古学人類学―』と

題したノート一冊があり、各代にわたって収集された考古資料は尨大な量に上ることがわかる。[2] 従って本学に寄託された資料は、最後まで井上家にのこされていたもので、本来の収集資料からいえば何十分の一かに過ぎない。それにしても、一点ずつに出土地・採集年月日・入手経路等が克明に注記されていて、考古学でいう一等資料であり、たとえ小片であっても重要な価値をもっていることはいうまでもない。

これらの他、考古資料に関連するものとして、石碑・銅鐘・鍔口・古瓦・瓦経等の拓本があり、また研究ノート、遺跡・遺物に関する見聞、あるいは所見を記したメモ、往復書簡・紀行文などさまざまの記録がある。主として井上頼文教授に係わるもので、その勤務地であり、後半生を送られた伊勢国に関するものが多く、現在すでに滅失している遺跡・古墳についての記録が多数存在している。ただ残念なことに、これらの記録が、まとまった形をとっているものが少なく、ほとんどが断片となっていて、全貌を把握するためには今後まだかなりの整理期間が必要であろう。

それにしても、これらの資料は、これまでその存在が知られなかったものである。従って一部を除いて、在地の伊勢—すなわち現在の三重県はもとより、考古学関係者の間においても未知の資料であった。そればかりでなく、伊勢の神宮皇学館において考古学を講じられ、伊勢国の古代遺跡の調査・研究に大きな足跡をのこされた井上頼文教授という人物の存在そのものが忘却されているというのが実情である。教授の勤務先であった神宮皇学館は、昭和二十一年に廃校され、昭和三十七年になって現在の皇学館大学に受け継がれたが、戦中・戦後にわたって辿った神宮皇学館の歴史ともかかわり、その狭間から生じたミステリーであったと言えるのかも知れない。

「井上氏旧蔵資料」のうち、考古資料については、佐藤直市教授の驥尾に附してその助言を得ながら私が担当して作業を進めて来た。この間にあって、史学科十四期生の石田慶子さんは小町塚経塚出土の瓦経資料を中心にして、同十五期生の岩谷奈津子さんは、伊勢国の古代遺跡をそれぞれテーマとして卒業論文を作成し、「井上氏旧蔵資料」を活用させていただいた。とくに岩谷奈津子さんは、伊勢国古代遺跡関係のまとまった記録を、史学科研究室の大谷浩子さん(旧姓中川、十三期生)の協力を得て筆写作業を進めてくれた。私自身も、昭和五十六年以来、両名の卒論指導と併行して、資料に関係する個所について現地調査と文献の収集を行なって来た。

「井上氏旧蔵資料」のうち、考古資料の全貌を把むにはまだかなりの日月を要するが、本稿ではとりあえず伊勢国に所在する古代遺跡関係の記録を紹介することにしたい。またこれらの作業を通じて、これまでまったく忘却されていた井上頼文教授の足跡を追跡しながら、その業績を

日本考古学史の一頁に加えたいというのが本稿を記すに至った動機であり目的である。

注

(1) 昭和五十五年は大手前女子学園の創立三十五周年に当たり、図書館の落成、史学資料教室の開設を記念して資料展を開催した。この時刊行した『資料展示目録』には、「井上氏旧蔵資料」のうち主要なものがのせられている。

(2) 井上頼圀・井上頼文の収集された考古資料は神宮皇学館に保管されていたことが考えられる。神宮皇学館は昭和二十一年に廃校となり、その蔵書は名古屋大学に、標本類は三重大学に移管された。現在の三重大学教育学部の歴史研究室には多数の遺物が収蔵されていることを仄聞しており、井上頼圀・井上頼文の収集資料の存在を確認したいと考えている。

二　井上頼文教授伝

井上頼文教授についての伝記として、昭和六年（一九三一）に発刊されている『萬葉廬井上頼文大人歌集抄』[1]の冒頭に、門人であった後藤高蔭氏によって記された「井上頼文大人小傳」がのせられているので、ここに引用させていただくことにしたい。

井上頼文大人小傳

明治の國學界に博覧強記と識見の高邁とを以って聞えしかの文學博士井上頼圀（マヽ）翁を父とし、貞淑文才を以って稱せられし本橋登羅子女史を母として文久元年二月九日我等が畏師、井上頼文大人は東都に出生し給ひぬ。

大人は幼より孝順深く又文学を好まれ、穎悟よく東西古今の書に通ず。國史は明治の初年大學の中博士たりし矢野玄道翁に、國語國文は同中博士權田直助翁に、國歌は明治十四大家の一人にして歌風優れし鈴木重嶺翁に、劍道は山岡鐵舟翁に就きて奥儀を究められき。

又小中村清矩、黒川眞頼、本居豊穎、木村正辭、小杉榲邨、栗田寛、重野安繹、星野恒、萩野由之等の諸博士達を師友として徴逐相研鑽されき。

明治二十七年の二月、神宮大宮司鹿島則文氏の切なる懇招あり。仍ち神宮皇學館草創の際教授として伊勢に來らる。學館の基礎の樹立、

學生の薫育に全力を傾倒せられ同館の中心たる神祇古典並に律令格式の類の主任として極めて懇切にして熱ある教授をなし以って幾千の神宮神職及び教員を養成せられしは洽く世の知る處なり。當時は參考に書無く地方に全く人乏しきの狀なりしに拘らず大人や精勵全く獨自の新路を深く開拓し、早くも古典の研究に補助學課として人類學、考古學、言語學、土俗學等の必要なるを認め其等の資料の蒐集比較研究に盡されし事は蓋し容易ならぬ努力なりき。

適〻徴古館の整理委員として斯界の泰斗坪井正五郎博士、高橋健自博士、有職故實家たる關保之助氏等の來田するあるや常に意見を討究せらるる事あり。就中坪井博士は大人を中央學界へ是非歸れとて切に薦むる事甚しかりき。博士は繁く大人を訪ひ談の研究方面に觸るるや出土品を連ねて深更鷄鳴に至る事屢なりき。今に至るも當時の發掘品無數を藏す。文學博士喜田貞吉氏、法學博士筧克彦氏の如きはかかる優秀なる研究資料を夙に地方に於て蒐集せしを賞揚し、中にも喜田博士は歴史に對する實物比較の公平無私なる大人の研讃法を常に激賞せらる。

神宮皇學館の基礎も漸く固く先づ功成るを見しの時、更に神宮よりの切望にて三ノ禰宜の要職に補せられ古典古式に通曉せる篤學者として萬般の顧問に推されぬ。大臣學者等の正式參拜ありて種々の質問ある時は必ず大人がかの明快なる答辯をなす例なりき。

大人此れより遺蹟發掘の研究を暫く中止し、一意本邦至高の神明に奉仕し大中小恒例の御祭典を初め御遷宮には至上の儀を奉仕し、天皇陛下、皇后陛下御親謁の御時は賢くも常に、天顔に咫尺し奉る御儀を掌られき。

大人休養の意あり。幸にして、大正十五年六月に至って上の聽許する所となり後進に道を開くの機を得らる。時に齢六十有六。正五位勲五等に叙せらる。その人爵は高からずと雖も人格をしたふ者の多き人望の篤き、大人の如きは蓋し世に比儔稀矣。教授神官を通じて年數のみを云ふも實に三十有餘年の永き烙勤なりき。

大人居を豐受大神宮の邊に寓せられ風月を友として壽せらる。今はもっぱら資料の整理に意を用ゐられ傍土地の教育、青年の指導を計らる。

それ大人の歌道の門人に至りては全國に洽し、又記紀萬葉の研究に至っては常に生等の親しく馨咳に接して畏服するところ、一刻も早く稿成りて世を益し給はん事切望に堪へざる處なり。

大人生粋の江戸兒にして名を廣めず功に誇る無し。交を俗に求めず清貧に安んじて唯讀書に耽るを以って無上の至樂となし飽くなきの研究を續けらる。明治二十七年以來皇學館長の補佐として又歴代の神宮大小宮司の顧問として盡されし隠れたる功績の如何に大なるかを思ひ不敏をも顧みずあへておのれらの知る事のみによりて小傳を記し、大人の七十の賀の記念として強ひて乞ひ得たる百首の五詠の巻頭に拙筆をものすと云ふ。

昭和六年夏

門人　後藤高蔭謹記

これによって、井上頼文教授の略歴を知ることができる。父頼囮翁は、明治から大正にかけて令名を馳せた国学の大家である。その長男として文久元年（一八六一）に出生された頼文教授は、博学多才であった父の血を享け、また学問を重んじるめぐまれた環境の中に生まれ成長されたのである。伝記の中に、師友として掲げられている人物を見ると、その一人一人が明治・大正の時代に文学・歴史・美術の各界において大きな業績をのこされた著名人であることに気付くであろう。

明治二十七年（一八九四）、時の伊勢の皇大神宮大宮司であり、皇学館長でもあった鹿島則文の要請によって、神宮皇学館の教授に赴任されることになった。(1)

神宮皇学館は、伊勢神宮を中心とした国家神道の興隆のため、それに役立つ神官を養成する学校として、明治十五年（一八八二）に、現在の三重県伊勢市に創設された学校である。明治二十九年（一八九六）に専門学校、さらに明治三十六年（一九〇三）には官立学校となった。頼文教授の赴任はこうした動きに呼応するものであろう。皇学館における教授の役割は、神祇古典と律令格式についての講義を担当されたことであり、当時「神典」とよばれた古事記・日本書紀・風土記等の古典や延喜式・類聚三代格・令集解・令義解等の内容に精通されていた。「井上氏旧蔵資料」には、おそらく教授がその研究に使用され朱字の注記が細かく施されている数十冊の典籍がのこされている。

この古典の研究、教授に当たって単に字句の解釈にとどまらず、その内容の理解のために人類学・考古学・言語学・土俗学（今日でいえば民族学・民俗学であろう）を補助学科として必要であることを認識し、その資料の収集に当たられたということである。

標題にかかげたように、本稿は井上頼文教授と考古学とのつながりを追及することが目的であるが、教授の体得された考古学が、本来は古典の研究のための補助学科であったかも知れないが、後節で見るように決して補助学科としての立場に止まらず、考古学の研究方法を十分に理解した上で多くの実践活動を試み、多くの業績をのこしておられることを先ず以て記しておきたい。

教授が神宮皇学館に奉職され、伊勢に居住されたことから、現在の伊勢市を中心とする地域の古代遺跡に関心が向けられ、現地調査や見学にも足繁く運ばれたことが当然考えられる。時には地方の人士が、教授の高名を聞いて調査研究を依頼することもあったであろうし、皇学館での教授の教え子がもたらす報道もあったであろう。こうした関係の足跡は書簡を見ることによってたどることができるのであるが、それは後日を期したい。

教授は神宮徴古館の整理委員にも任じられていたようである。この神宮徴古館は現在も伊勢市神田久志本町の神宮外苑にあり、神宮関係の諸資料が収蔵展示されている。この間にあって、日本の人類学・考古学の創始者とも言える坪井正五郎博士や高橋健自博士と親交のあったことが伝記に記されているが、考古学者ばかりでなく、多くの諸学者とのつながりが見られるのである。

その後、学者としての道を歩まれて来た教授は、神宮からの切望によって神官すなわち三ノ祢宜職につかれることになった。(2) 以後、大正十五年（一九二六）、六十六歳の時に辞されるまで長期にわたってその要職にあって、よくその任を果たされたのである。

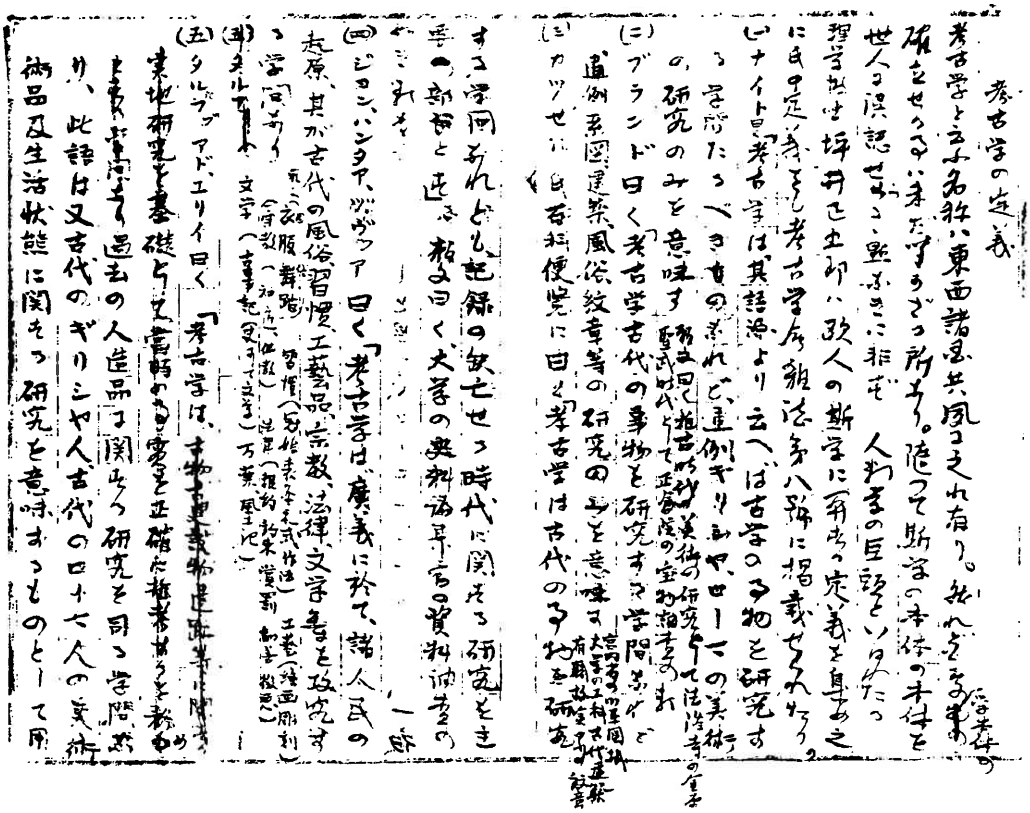
教授は昭和七年二月十一日、七十一歳で逝去された。墓は京都市右京区竜安寺住吉町の住吉山墓地にある。

注

(1) 昭和七年四月刊行の『神宮皇学館五十年史』に載せられている「舊職員在職年表」には次のように記されている。

就職年月	退官職年月	摘要	官職名	氏名
明二七・二9	明三〇・六1	轉任	教授	井上頼文
明三〇・六3	明三一・三	退職	助教授	同
其後七月授業嘱託トナリ變遷多ク				
明三五・一二3	大二・一一	轉任	教授	同

(2) 教授の神宮祢宜就任の年月は現在のところ不明である。後日、その確認を期したい。



考古学の定義

考古学とは名称は東西諸国共通これあり。然れども多くの研究せらるるは未だ学ずるの所なり。随って斯学の本体の本体を世人の誤認せること無きに非ず　人類学の目的をいわんたる理学的は坪井正五郎氏の定義を尊重するに足る。考古学を狭義に解すれば考古学は人類学の一部に相当する。

(一)ナイトは「考古学は其語源より云へば古学の事物を研究する学問たるべきものなれど、通例ギリシヤ、ローマの美術の研究のみを意味す」

(二)ブランドは曰く「考古学は古代の事物を研究する学問なれど通例建築、風俗、紋章等の研究のみを意味す」

(三)カッセルは曰く「考古学は古代の事物を研究する学問なれども記録の欠乏せる時代に関する研究をも含む」

(四)ジョン、ハンタアは曰く「考古学は廣義に於て、諸人民の起原、其が古代の風俗習慣、工芸品、宗教、法律、文学等を攻究する学問なり」

(五)タイラアは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(六)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(七)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(八)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(九)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十一)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十二)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十三)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十四)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

(十五)ヒルブラアドは曰く「考古学は、事物の実物に基づき、実地研究を基礎とし、言語、文字、宗教を正確に推考するを教とす」

第1図　考古学の定義（井上頼文筆）

三　井上頼文教授の考古学

近世の集古・好古趣味にその萌芽を見たわが国の考古学は、明治の初年に来日し大森貝塚を発見、発掘したアメリカ人エドワード・モースを経て、東京帝国大学に人類学教室を創始された坪井正五郎博士、さらにその門に学び、京都帝国大学にはじめての考古学講座を開講された浜田青陵博士、この両泰斗によって樹立された。浜田青陵博士の著わされた『通論考古学』は不朽の名著であり、今日でもその生命は失われていないが、考古学の定義として、

考古学とは、過去の人類の物質的遺物を資料として人類の過去を研究する学問である。

とされた。

ところで、神宮皇学館にあって、古典の考究に考古学を採用された井上頼文教授は、考古学に対して、どのような見解なり考え方を持っておられたのであろうか。幸い、「井上氏旧蔵資料」の中には、「考古学の定義」と記された小冊がある（第1図）。罫紙七枚の裏を使って墨書された草稿で、研究ノートとも講義の原稿とも言えるもので、考古学の定義に関して東西の学者の説を述べてご自身の考え方も披瀝されている。まず全文を紹介することにしたい。なお句読点は筆者が補足

したものもある。

考古学の定義

考古学と云ふ名称ハ東西諸国共夙に之れ有り。然れどもその学本体の確立せる事は未だ聞かざる所なり。隨って斯学の本体を世人に誤認せらるゝ點なきに非ず。人類学の巨頭といはれたる理学博士坪井正五郎ハ欧人の斯学に関する定義を集め之に氏の定義をも考古学會雑誌第八號に掲載せられたり。

(一) ナイト曰く「考古学は其語源より云へば古学の事物を研究する学問たるべきものなれど、通例ギリシヤ、ローマの美術の研究のみを意味す」頼文曰く推古時代の美術の研究として法隆寺の金堂聖武時代として正倉院の宝物調査の類

(二) ブランド曰く「考古学古代の事物を研究する学問なれど通例系図、建築、風俗、紋章等の研究のみを意味す」宮内省の御系図掛、有職故実大学の工科古代建築家の紋章

(三) カッセル氏百科便覧に曰く「考古学は古代の事物を研究する学問なれども、記録の欠失せる時代に関する研究を主要の部分とす」頼文曰く、大学の史料編集官の資料調査の如き類なり

(四) ジョン、ハンタア、ヴヴッア曰く「考古学は、廣義に於て、諸人民の起源、其が古代の風俗、習慣、工藝品、宗教、法律、文学等を攻究する学問なり」頼文、風俗（衣服、舞踏）習慣（冠婚、喪祭、礼式、作法）工藝（絵画、彫刻）宗教（神道、仏教）法律（規約、約束、賞罰、勧善、徴悪）文学（古事記、史にして文学）万葉、風土記

(五) タルフブアド、エリイ曰く「考古学は、過去の人造品に関する研究を司る学問なり、此語は又古代のローマ人の美術品及生活状態に関する研究を意味するものとして用ゐらる」頼文曰、古代の人の制作に関する美術工術、衣食住、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友、貴賤貧富、士農工商、長幼老少、尊卑

(六) 理学博士坪井正五郎氏曰く「考古学は古物、古建設物、遺跡等に関する實地研究を基礎として當時の事実を正確に推考するを務めとする学問なり」頼文曰く、石、石鏃、石棒、石包丁、石錐、石斧、の類、佩玉時代、刀剣、甲冑、鏃、鏡、壺、甕、有孔土器、提壺、平瓮の類、建物、石窟、土窟、塚穴、石槨、遺跡、貝塚、古墳等

(七) 日本考古学の著者、八木奘三郎氏曰く、考古学は、遺蹟遺物を基礎として或る時期の間に事物の變遷發達せる迹を科学的に推究する学問なり。

(八) 頼文曰く、考古学とは皇祖皇宗の御稜威國体の精華を神跡霊蹤に依り或は古文古記に依て益講明宣揚する学問なり。

西洋で考古学の基礎たる遺跡遺品を秩序的に記載するに當って大抵を之を二種に分てり。第一は物の種類を分ち、一種つゝ研究しその本元を極むるもの。（中略）第二は、時代の前後を以て比較研鑽する法方（マヽ）なり。その順序は、

第一　先史考古学
- 甲　石器時代
  - (一) 舊石器時代
  - (二) 中石器時代
  - (三) 新石器時代
- 乙　金属器時代
  - (一) 青銅器時代
  - (二) 鐵器時代

第一の先史時代と云うのは概ね口碑や記録の徴す可き者無き古代に當って、既に社會に棲息した氏族が、其の時世時世に從って、種々の迹と物とを遺したのである。之を後の時代と分たんが為め、即ち歴史に先だった時代という意で、先史時代と命名したのである。右の内、石器、青銅、鉄器等、時期に依て各時器の物質を異にせり。同じ石器時代にも新中舊の差別がある。定かし是等は欧米にては認め得られど我が日本の如きに至っては、如此区別なく石器の場合に於てハ新時代の遺物を出すのみであるといふ事である。金属器の時代に於ては、青銅の遺物を見る事甚稀れである。

そこで、石器時代の名称ハ今から六十年計り以前にデンマルクと、スウェーデンの学者――等が古物研究の結果として用ひ出せし言葉也。青銅時代鉄時代と云う二つの名目は遥か昔よりあったもので西洋紀元前第八世紀即ち今より二千六百年程以前の詩人ヘシヨッドが既に青銅時代鉄時代の言葉を使用せり、ヘシヨッドは、猶、人類の歴史を五期に別ち人間堕落の順序をも記述した。それは、

第一期　金時代　此の時代の人民は無邪気にて幸福多く、病苦老衰を感ずる事無く睡眠して死せり。

第二期　銀時代　此時代の人民ハ楽少く、命短く、老衰をも感じたり、此人民は敬神の心乏かりしを以て、ゼウス神の為に絶されたり。

第三期　青銅時代　此時代の人民は、ゼウス神がトネリコの木より造り出だせるものにして、青銅の家に住ひ、青銅の武器を以て争闘し、青銅の農具を以て耕作せり。

第四期　英雄時代　此時代の人民は前時代に比して稍優る。

第五期　鉄時代　是ヘシヲッド自身の住める世なり。不正なる事行はれ、苦痛多し。

と、云へり。

前記の如く、人類経過の迹を推究すれば、一人種の進歩発達して、石器より金属の具に遷る者あれども、否らずして前後其種族を異にせる邦國もあり、頼文曰く、當時の人類学者は曰く、我か日本の如きも先住民族を天孫人種の統治せる故、前後種類を異にせる種族に属すと、されどこは、大問題にして種々に論ずべきに非ず。又石器、金属器等使用の人民前後其種族異りと雖も、其時期の隔絶せると、隔絶せずして同時に共住する者との二種別あり。當時の人類学者は曰く、日本の如きは、石器、金属器等使用の人民前後其の種族を異にして、其の時期も隔絶せり。米國の如きは、後に移住せる欧洲人民が、金属を使用せるに関らず原住者たるインデアンの内には、今も石器製造し、石器を使用する者あり。

第二の原史時代と云ふのは、口づたへや、縄を結んで約束の付合とした類より移って不完全なる記録を作り、やゝ進んで歴史と認む可きものを具ふる迄の間を指さす。結縄の習俗ハ今も沖縄に残っている實際に使用した縄が徴古館の倉庫につくられて居る。結びかたが千状万態で、その説明した書類もあり。

第三の有史時代とは、漸具備に近き歴史を作れる時代也。

博く世界の人類が発達したる状況を考ふるに、或者は長足の進歩をなし、或者は発達の迹を見ず、此の差雲泥の相違ある以所(マヽ)は、一に四囲の境遇と人種の特性如何とに因る。然れど非常の進歩を為せる上民の漸次退歩し来れる例証尠なからず。

古墳時代

第一期　諸冊二尊の開國より神武天皇まで

第二期　神武帝より推古帝まで

第三期　推古帝より奈良朝の末まで

第一期

天孫降臨以後歴代日向の地に居住し給ひ、御遺骸を葬り奉りしは、概ね山嶺なりしが如し、但し茸不合尊、玉依毘賣尊の御陵と稱するもの山麓にあり。

古墳内部の構造附棺槨の制

○神代三陵には石棺無し

○日向の高千穂の窟に入りし盗人の話

○書紀神代巻の一書に素盞嗚尊の御言葉と記して

杉及櫲樟、此両樹者可二以為一浮宝一、檜可二以為一瑞宮之材一、柀可二以為一顯蒼生奥津棄戸将臥之具一云々（筆者注、上に「木棺の証」とあり）

自二殿勝戸一云々千引石引二塞其黄泉比良坂其石置レ中各對立而度二事戸一之時云々（筆者注、上に「石廓の証」とあり）

天照大神岩戸隠

第二期

蒲生君平氏山陵志（筆者注、本文は省略）

このように、東西の学者七人の考古学の定義についての諸説を紹介した後、「賴文曰く」として、

考古学とは皇祖皇宗の御稜威國体の精華を神跡霊蹤に依り或は古文古記に依て益講明宣揚する学問なり

と記されている。今日から見れば保守そのもの、あるいは右翼の権化とも看做されるかも知れないが、教授の活躍された時代とその職責を見れば、当然のことであったと考えざるを得ないのである。

四　伊勢国古代遺跡に関する資料と所見

前節に見たように、井上賴文教授は神宮皇学館に奉職され、現在の伊勢市に居住されていたことから、「井上氏旧蔵資料」の中には、伊勢神宮に関係のある諸資料や、伊勢国の古代遺跡や寺社に関する資料が数多くふくまれている。その一つとして、昭和五十四年三月に全域が国の史跡に指定され、その前後から三重県教育委員会によって発掘調査の進められている、三重県多気郡明和町に所在する斉宮（さいくう）跡の基本的文

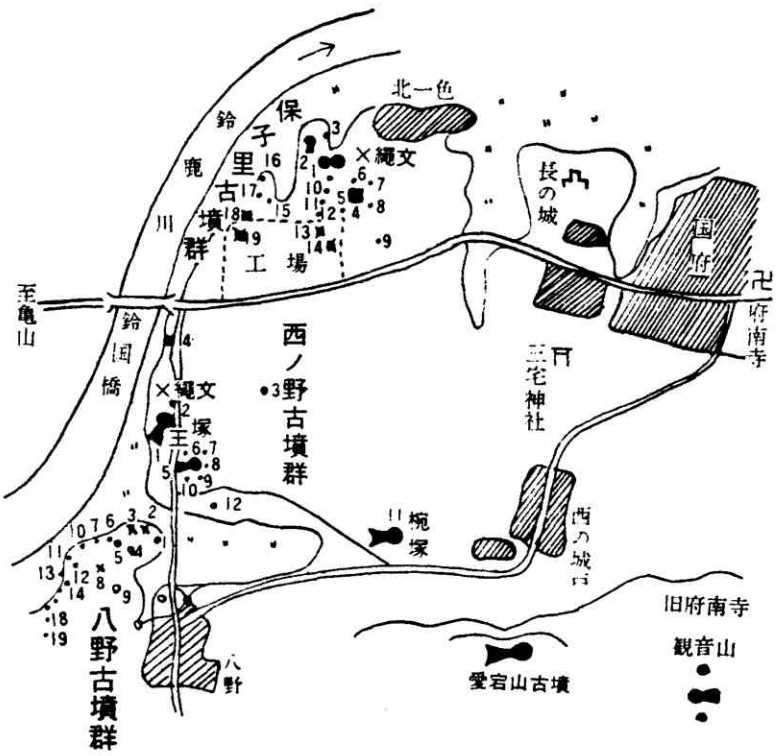
献として知られた御巫清直(みかんなぎきよなお)の『齋宮寮考證』や『齋宮寮廢蹟考』の自筆本は、他にないものであり、これ一つだけを取り上げても重要な価値を持つものである。

伊勢国の古代遺跡に関する資料としては、教授自身が記された冊子・ノート・研究メモ等と、古鏡・古瓦・瓦経などの拓本のほか、研究あるいは調査を依頼された事項についての応答、往復書簡、さらにそれに関して先方から送られ、あるいは預かられたり譲り受けられた書類に至るまで多種多様である。そのすべてについて目を通す段階にまでは至っていないが、今回はその中から、資料そのものが比較的まとまっているもの、対象となっている遺跡や遺物が現存し、学界で周知されている遺跡の中から数点を抽出し、それを紹介することにしたい。

1　鈴鹿市の古墳群

伊勢平野の中央を占める鈴鹿川の流域には、古墳時代の中期から後期にかけて築造された多数の古墳が存在している。とくに現在の鈴鹿市国府の地域には、史跡に指定されている王塚古墳を盟主とする西ノ野古墳群があり、その南には愛宕山古墳を盟主とする八野古墳群、さらに北方には保子里(ほごり)古墳群がある。とくに西ノ野古墳群は、現在は十一基しかのこっていないが、明治時代の村絵図には九十一基の古墳が描かれているということであり、これらをふくめてこの地域に一大古墳群の存在がみとめられ、伊勢国の中でも中枢の地域であったことを物語っている(第2図)。

そのうち保子里古墳群は、鈴鹿川に架る鈴国(れいこく)橋の東詰、県道の北方に当たる段丘上に立地し、現在十九基の存在が確認されてい



第2図　鈴鹿市国府附近の古墳分布(『鈴鹿市史』第二巻による)

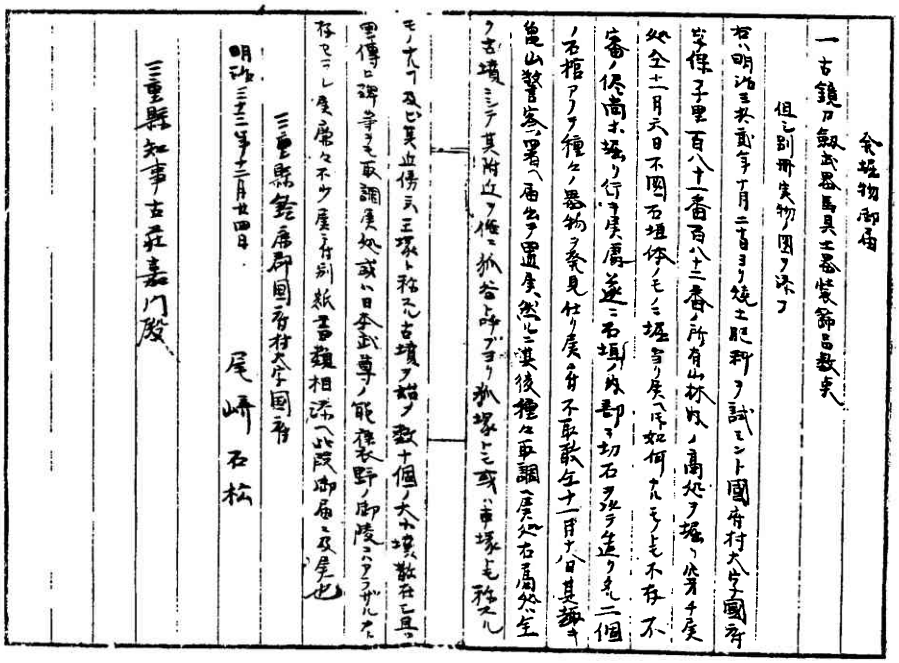
第3図　保子里1号墳実測図（『鈴鹿市史』第二巻による）

る。第一号墳は「車塚」とよばれ、長径約五〇㍍、東西に主軸をおいて直径二〇㍍、高さ五㍍の円墳が並び、二基をめぐる周溝と、二基の中間に造出しのある双円墳である（第3図）。

明治三十二年（一八九九）、土地の所有者である尾崎石松によって発掘され、二基の円丘のうち西墳に二つの組合式石棺があり、その内外から夥しい数の副葬品が出土した。仿製竜文鏡、舶載の細金細工垂飾付の耳飾一対、銀象嵌束頭、鞘口、鉄製の刀・鋤・鏃・斧・鎧の残欠、金環、硬玉・碧玉・瑪瑙・琥珀・埋木・瑠璃製の勾玉・管玉・棗玉・切子玉・丸玉・小玉・などの装身具、轡・鉸具・杏葉残欠・鉄鎖・銅鈴などの馬具一括と須恵器・土師器等で、現在も東京国立博物館に収蔵され、学界周知の資料となっている。

「井上氏旧蔵資料」の中には、土地所有者尾崎石松の手に成る「発掘物御届」①と、おそらく発見当時取調を依頼された宮崎丹弥氏によってしたためられた「王塚并ニ車塚ニ付キ取調書」②と「古器物図」③がある。

①の「発掘物御届」は、明治三十三年十二月二十四日付で三重県知事宛に提出した書類のおそらく控で、罫紙が使用され墨書である。それによると、明治三十二年の十月二十日から、〃焼土肥料を試みんとして〃所有地である保子里一八一・一八二番地の山林を掘ったとしている。当初から古墳であることがわかっていて発掘をしたものか、文面通りの目



第4図(1)　「発掘物御届」

的で偶然に遺物を発見したのか、現在としては不明である。全文は次の通りである。

発掘物御届

一　古鏡刀劔武器馬具土器装飾品数点

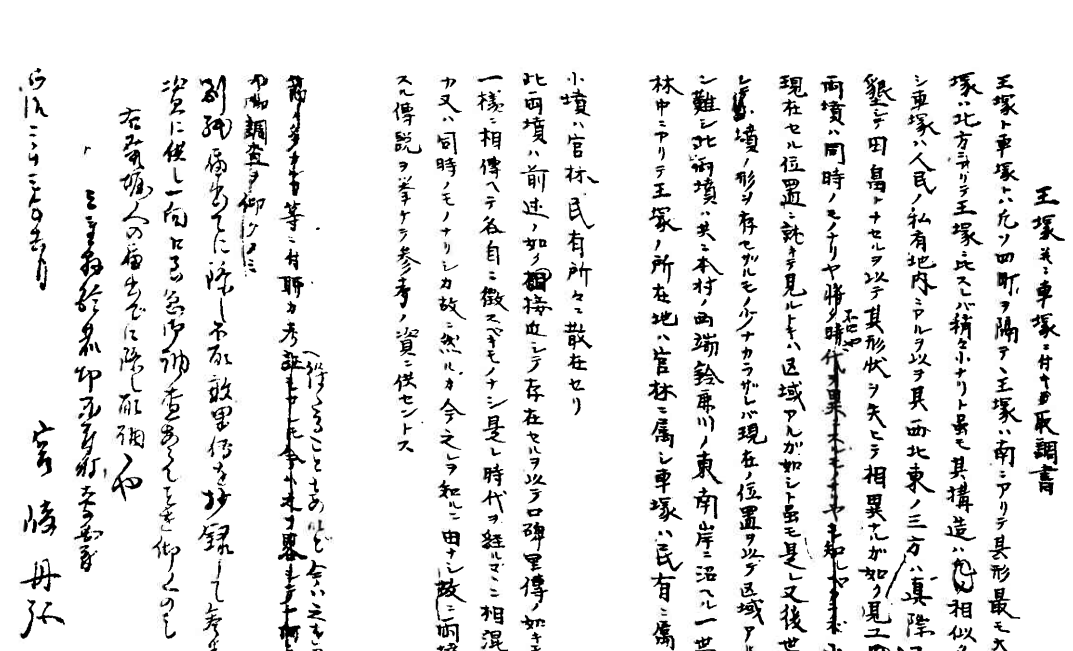
但シ別冊実物ノ図ヲ添フ

右ハ明治三拾貳年十月二十日ヨリ焼土肥料ヲ試ミント國府村大字國府字保子里百八十一番百八十二番ノ所有山林内ノ高処ヲ掘リ穿チ候処仝十一月六日不図石垣体ノモノニ掘当リ候ヘトモ如何ナルモノトモ不存不審ノ儘尚ホ堀(マヽ)リ行キ候處遂ニ石垣ノ内部ニ切石ヲ以テ造リタル二個ノ石棺アリテ種々ノ器物ヲ発見仕リ候ニ付不取敢仝十一月十八日其趣キ亀山警察署ヘ届出テ置候然ルニ其後種々取調ヘ候処右高処ハ仝ク古墳ニシテ其附近ヲ俗ニ狐谷ト呼ブヨリ狐塚トモ或ハ車塚トモ称スルモノナルヿ及ビ其近傍ニハ王塚ト称スル古墳ヲ始メ数十個ノ大小墳散在シ且ツ里傳口碑等ヲモ取調候処或ハ日本武尊ノ能褒野ノ御陵ニハアラザルカト存セラレ候廉々不少候ニ付別紙書類相添ヘ此段御届ニ及候也

三重縣鈴鹿郡国府村大字国府

明治三十三年十二月廿四日　　尾崎　石松

三重縣知事　古荘嘉門殿



王塚并ニ車塚ニ付キ取調書

王塚ト車塚トハ凡ソ四町ヲ隔テ王塚ハ南ニアリテ其形最モ大ニ車塚ハ北方ニアリテ王塚ニ比スレバ稍々小ナリト虽モ其構造ハ相似タリ但シ車塚ハ人民ノ私有地内ニアルヲ以テ其西北東ノ三方ハ真際マテ開墾シテ田畠トナセルヲ以テ其形状ヲ失ヒテ相異ナルガ如ク見ユ此ノ両墳ハ同時ノモノナリヤ否や小墳ノ現在セル位置ニ就キテ見ルトキハ区域アルガ如シト虽モ是レ又後世開墾シテ小墳ノ形状ヲ存セザルモノ少ナカラザレバ現在ノ位置ヲ以テ区域アリトハナシ難シ此両墳ハ共ニ本村ノ西端鈴鹿川ノ東南岸ニ沼ヘル一帯ノ山林中ニアリテ王塚ノ所在地ハ官林ニ属シ車塚ハ民有ニ属シ他ノ小墳ハ官林民有所々ニ散在セリ

此両墳ハ前述ノ如ク接近シテ存在セルヲ以テ口碑里傳ノ如キモ皆ナ一様ニ相傳ヘテ各自ニ徴スベキモノナシ是レ時代ヲ経ルニ相混乱セシカ又ハ同時ノモノナリシカ故ニ然ルカ今之レヲ知ルニ由ナシ故ニ両墳ニ関スル傳説ヲ挙ケテ参考ノ資ニ供セントス

第4図(2)　「王塚并ニ車塚ニ付キ取調書」

②は宮崎丹弥による取調書で、車塚すなわち保子里古墳群の一基に関連して、南方に存在する王塚について述べ、地元の伝承に言及して日本武尊の能褒野陵ではないかと考証している。これを記した宮崎丹弥氏は、国府集落に所在する三宅神社の宮司で、歴史学・考古学にかなりの識見があったらしく、この発見に程近い明治三十五年（一九〇二）発刊の『考古界』第二巻第三号に「伊勢國王塚并に車塚」、同第七号には「伊勢國鈴鹿郡國府村王塚考証①」、明治三十六年（一九〇三）発刊の『考古界』第二巻第八号に「伊勢國鈴鹿郡國府村王塚考証②」がそれぞれ掲載されている。この書類はそれの骨子となったものであろう。全文は次の通りである。

王塚并ニ車塚ニ付キ取調書

王塚ト車塚トハ凡ソ四町ヲ隔テ王塚ハ南ニアリテ其形最モ大ニ車塚ハ北方ニアリテ王塚ニ比スレバ稍々小ナリト虽モ其構造ハ相似タリ但シ車塚ハ人民ノ私有地内ニアルヲ以テ其西北東ノ三方ハ真際マテ開墾シテ田畠トナセルヲ以テ其形状ヲ失ヒテ相異ナルガ如ク見ユ此ノ両墳ハ同時ノモノナリヤ否や小墳ノ現在セル位置ニ就キテ見ルトキハ区域アルガ如シト虽モ是レ又後世開墾シテ小墳ノ形状ヲ存セザルモノ少ナカラザレバ現在ノ位置ヲ以テ区域アリトハナシ難シ此両墳ハ共ニ本村ノ西端鈴鹿川ノ東南岸ニ沼（マヽ）ヘル一帯ノ山林中ニアリテ王塚ノ所在地ハ官林ニ属シ車塚ハ民有ニ属シ他ノ小墳ハ官林民有所々ニ散在セリ

此両墳ハ前述ノ如ク接近シテ存在セルヲ以テ口碑里傳ノ如キモ皆ナ一様ニ相傳

ヘテ各自ニ徴スベキモノナシ是レ時代ヲ経ルマヽニ相混乱セシカ又ハ同時ノモノナリシカ故ニ然ルカ今之レヲ知ルニ由ナシ故ニ両墳ニ関スル傳説ヲ挙ケテ参考ノ資ニ供セントス

伊勢名勝志ニ曰ク

王塚　国府村ノ西方字西ノ野ニアリ鈴鹿川ノ東岸ニ位ス面積貳千六百廿五坪高サ凡ソ貳丈許南北ニ長ク北ハ高クシテ南ハ稍低シ周圍土居及び溝ノ址ヲ存シ老松雑樹(マヽ)蔥林ヲ為ス里人傳ヘテ日本武尊ノ陵トナス

按ズルニ日本紀日本書紀(是ハ古事記日本書紀ノ誤リナラン今原本ノ儘ニス)共ニ尊ノ薨所ヲ明記セズ寛平熱田縁(マヽ)記ニ渡ニ鈴鹿河中瀬ニ忽隨ニ逝水ニ也謂崩時年三十仍号ニ其瀬ニ曰ニ能知瀬能知者命終之謂也今改為ニ長瀬ニ訛也云々トアリ本村古長瀬郷ノ地ニシテ隣村菅(マヽ)内村ニ長瀬神社アリ而シテ又鈴鹿川ニ沿ヘリ此地域或ハ其薨所ニハ非ルカ暫ク疑ヲ記ス

トアリ又村誌王塚ノ條ニ

王塚所在本村ノ西邊字西ノ野ト称スル所ニシテ鈴鹿川ノ東岸ニアリ而シテ其ノ近傍及ヒ字牛落ノ内ニモ陪葬ト覚ボシキ小墳所々ニ散在セリ

形状北ヨリ南ニ長ク引キ構ヘテ北方高ク南方少シ低クシテ中間ニ稍々窪メリ周囲ニ土手アリテ堀ノ形状ヲ残セリ老松繁茂シ雑木相交ハリテ蔥葱林ヲナス全ク上代ノ御陵、ノ形ニシテ千歳以上ノ古墳ト云フベシ

雑項云々能褒野ノ御陵取調ノ際王塚ヲ検セラ(レ)タリ今考フルニ彼ノ記紀二典及ヒ熱田縁起等ニ記載スル所往符合スル所アリ即チ縁起ニ曰ク渡鈴鹿河中瀬忽隨逝水謂崩也時年三十仍号其瀬曰能知瀬能知者命終之詞也今改為長瀬訛也延喜神名式云伊勢国鈴鹿郡長瀬神社云々トアリ所謂長瀬神社ハ隣村菅内村ノ産須那社ニシテ此社往古ハ田地ニアリカトモ水捐(マヽ)ニ依テ今ノ社地ニ移スト此地王塚ヲ去ル事僅カニ五町許リナリ又本村王塚ノ東南ニ長瀬ト称スル處アリ今ハ一区域ノ字名ナレトモ古老ノ言ニヨレハ古ヘハ八野村ノ邊ヨリ一連ニ山ノ原ヲ長瀬ガ原ト云ヒ猶ホ菅内村ノ長瀬ト称スル地トモ接續シテ長瀬ト称セシナリ今猶ホ長瀬カ原ノ称遺レリ古屋艸紙ニモ菅内村八野村阿野田村等ヲ長瀬郷ト載セタリ此古ヘノ長瀬郷ニシテ和名抄ニ載スル所ノ長瀬郷ナリ然ルヲ後世長沢村ヲ以テ長瀬郷トスルハ村名ノ沢ト郷名ノ瀬トヲ牽強附会シテ称スル所ニシテ古ヘノ長瀬郷ニテハ非ザルベシ又本村字保子里ハ地券改正迄ハ発ノ字ヲ書シテ保子里ト訓セリ此レ所謂白鳥ノ飛ヒ出テショリ其地ノ字名トナリシナラム其他隣村ニ八野村アリ牛落ト称スル所アリ又笹田ト云ヒ両子塚塚本御幣綿貝戸等皆其御陵ニ由アリケノ字名ナリ然レトモ旧記ノアルナクシテ其

詳細ハ知ルニ由ナシ

トアリ日本武尊ノ御陵ノ事ハ古くよりかれこれ争論ノアリシを漸ク明治十二年ニ至リ川崎村大字田村ナル丁子塚ヲ以テ尊ノ御陵なりと定められたりと聞きたるを今又国府村ノ王塚斉ニ車塚ヲ以テ尊ノ御陵ト云フハいとも恐きことなれとも右ニ記載せるか如キ里傳のあるあり又今回車塚より発掘セシ器物ノ容易のものにあらず其時代も亦尊ノ崩御ノ前後ヲ去ル事遠カラで当時のものと推考せらるゝことの多ければ他に御認定の御陵ありとも若しも実の御陵のこれならんにハいひ出さぬこそ反りて恐きことなりと思ひ定めて目下あれこれ取調ふるにひとり本村王塚の附近のみならす隣村の地理地名等にも其証據に供すべきものいよいよ多くかへりて今の御陵は日本武命(ママ)の御陵にあらで健貝児命の御墳墓の地ならんかと思はるゝ節のいと多かるとも等ニ付聊カ考へ得たることもあれど今は之を畧して別紙届出てに際し不取敢里傳を抄録して参考の資に供し一向に至急御調査あらんことを仰ぐのみ

右発掘人の届出でに際し取調候也

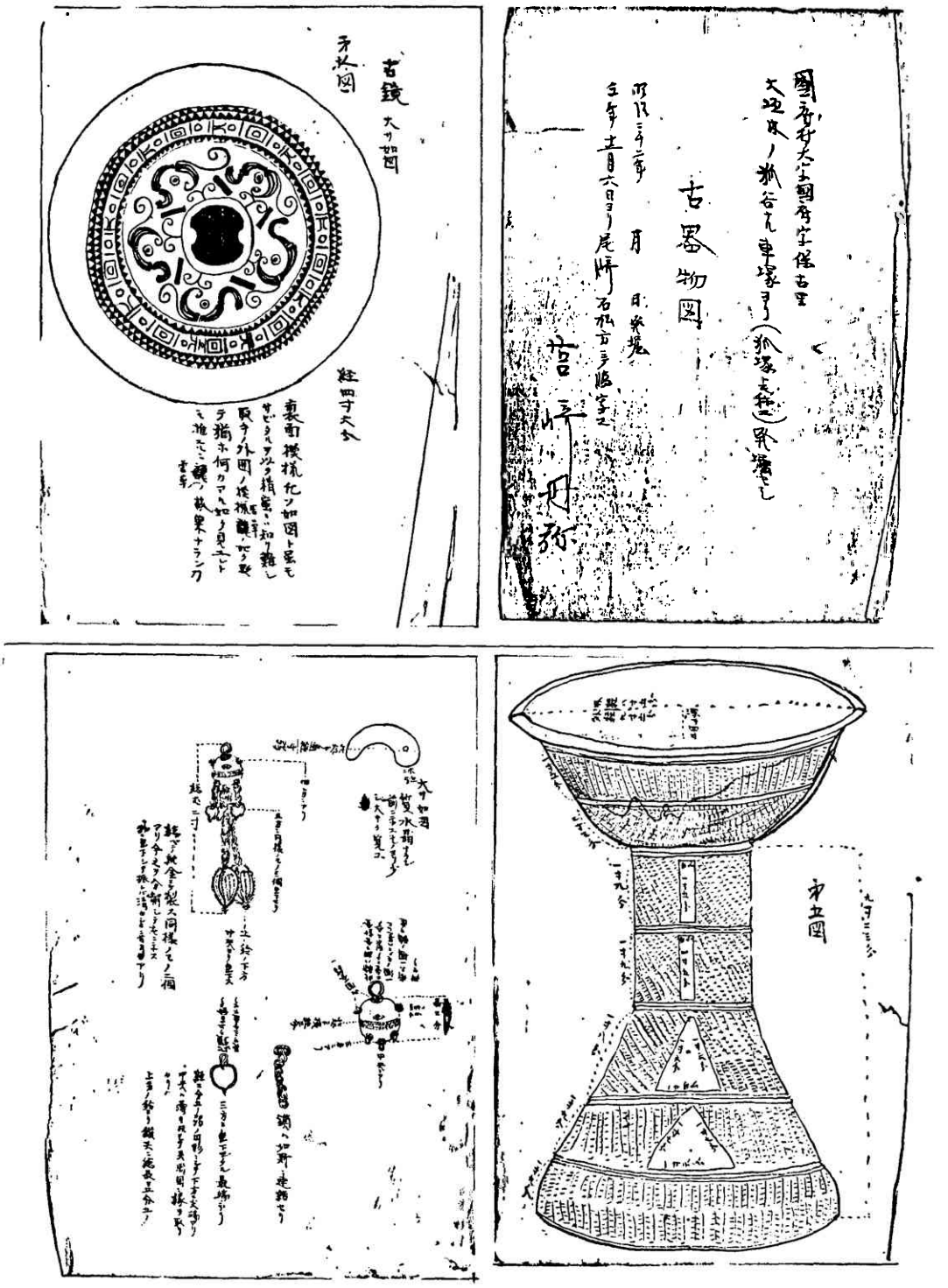
三重縣鈴鹿郡国府村大字国府

宮崎丹弥

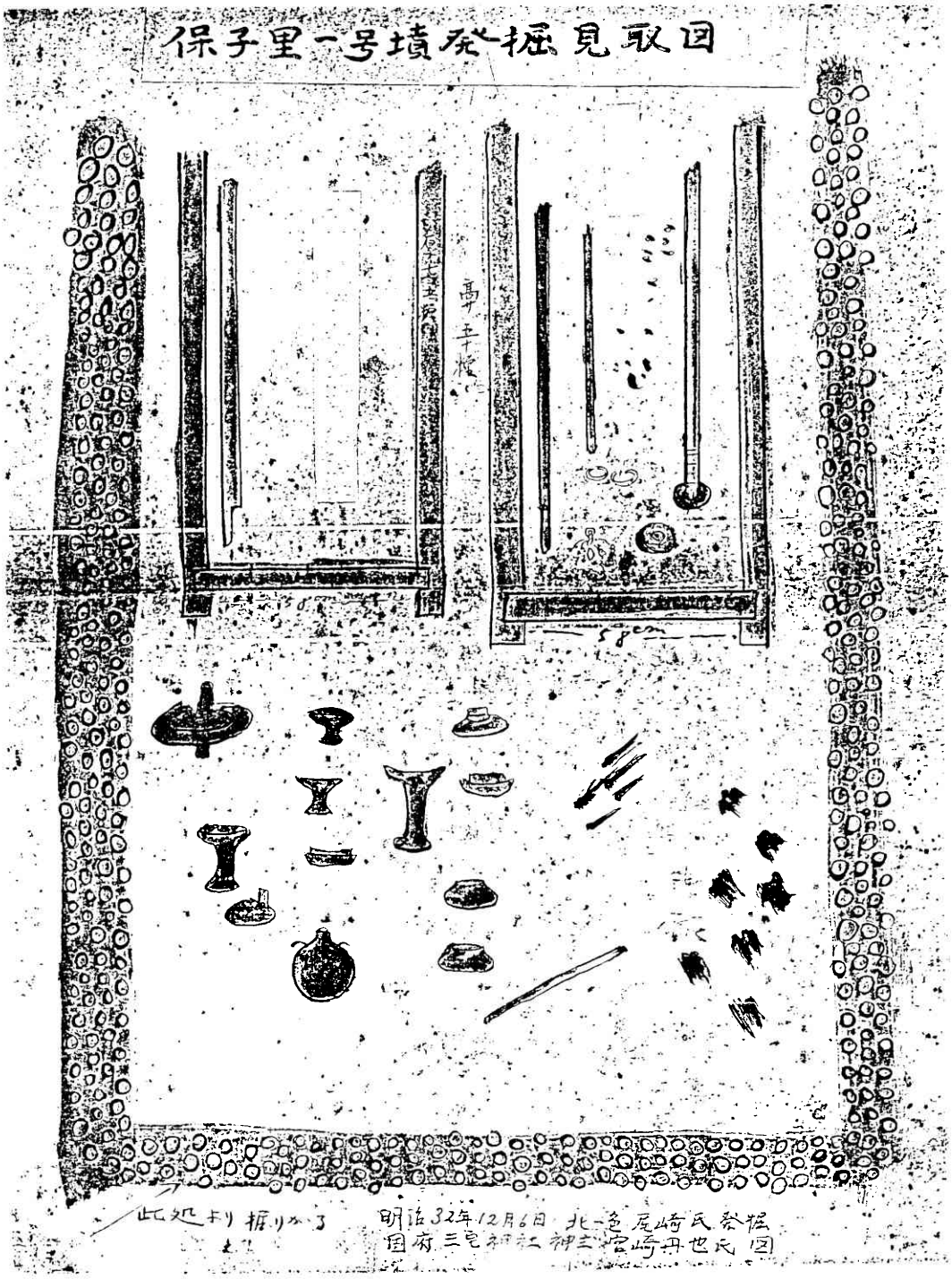
明治三十三年十二月

③の「古器物図」は、美濃半紙二十七枚から成る図録で、表紙に〝明治三十二年　月　日（筆者注、月日の数字は入っていない）発掘〟〝仝年十二月六日ヨリ尾崎石松方ニテ臨写之〟とある。一つ一つの遺物について克明な図を描き、寸法・形状・特徴などの注記が加えられている。第一図から第三十六図まであり、出土遺物のすべてが描かれているのであろう[2]（第5図）。現在、東京国立博物館に所蔵されている一括の出土遺物の発見当時のすがたを知ることのできる資料として重要な価値をもっている。昭和二十六年に奈良国立博物館で開かれた「三重考古展」に出陳され、昭和二十九年に刊行された『三重考古図録』に遺物の一部がのせられている。

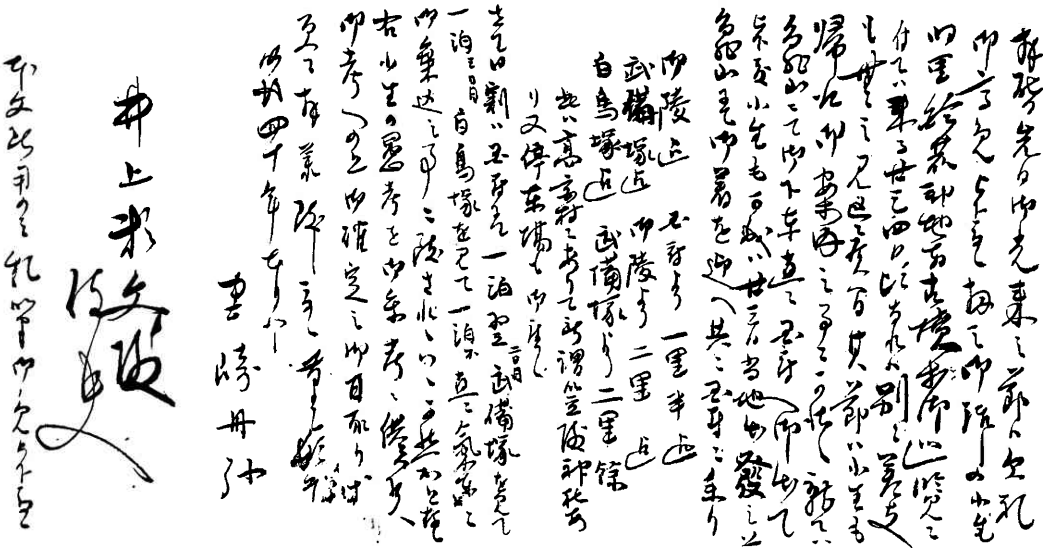
この宮崎丹弥氏と井上頼文教授のつながりは次の書簡によって知ることができる（第8図）。



第5図　古器物図（宮崎丹弥氏筆）



第6図　保子里1号墳発掘見取図（宮崎丹弥氏筆）



第8図　宮崎丹弥氏より井上頼文教授に宛てた書簡

拝啓先日御光来之節ハ欠礼
御高見被下度候、扨て御話しの小生
旧里鈴鹿郡地方古墳御巡覧ニ
付てハ来る廿三四日頃なれは別ニ差支
も無之見込ニ居候間、其節ハ小生も
帰郷御案内之事ニ可仕候、就てハ
亀山ニて御下車直ニ国府へ御出て
被下度、小生も可成ハ廿三日当地出發之上
亀山にて御着を迎へ共ニ国府ニ参リ
御陵迄　国府より一里半迄
武備塚迄　御陵より二里　迄
白鳥塚迄　武備塚より二里迄
此ハ高宮村ニありて所謂笠度神社あ
り又停車場も御座候
さて日割は国府にて一泊、翌二日目武備塚を見て
一泊、三日目白鳥塚を見て一泊か、直ニ気車(マヽ)ニ
御乗込ミ事ニ致され候ハヽ、可然かと存候
右小生の愚考を御参考ニ供之候
御考への上御確定之御日取り
更て拝承致し度候　草々頓首

明治四十年七月八日　　侍史

宮崎丹弥　　本文所用のみ乱筆御免被下度候

井上頼文殿

なお、保子里古墳群については、三重大学歴史研究会によって現状調査が行なわれ、車塚すなわち保子里一号墳の実測図が、同会の機関誌である『ふびと』第三十二号（昭和五十年）に掲載されている（第3図）。

注

(1) 鈴鹿市史編さん委員会編『鈴鹿市史』第一巻（昭和五五年八月）、および『三重の遺跡』（昭和五三年一一月）参照。

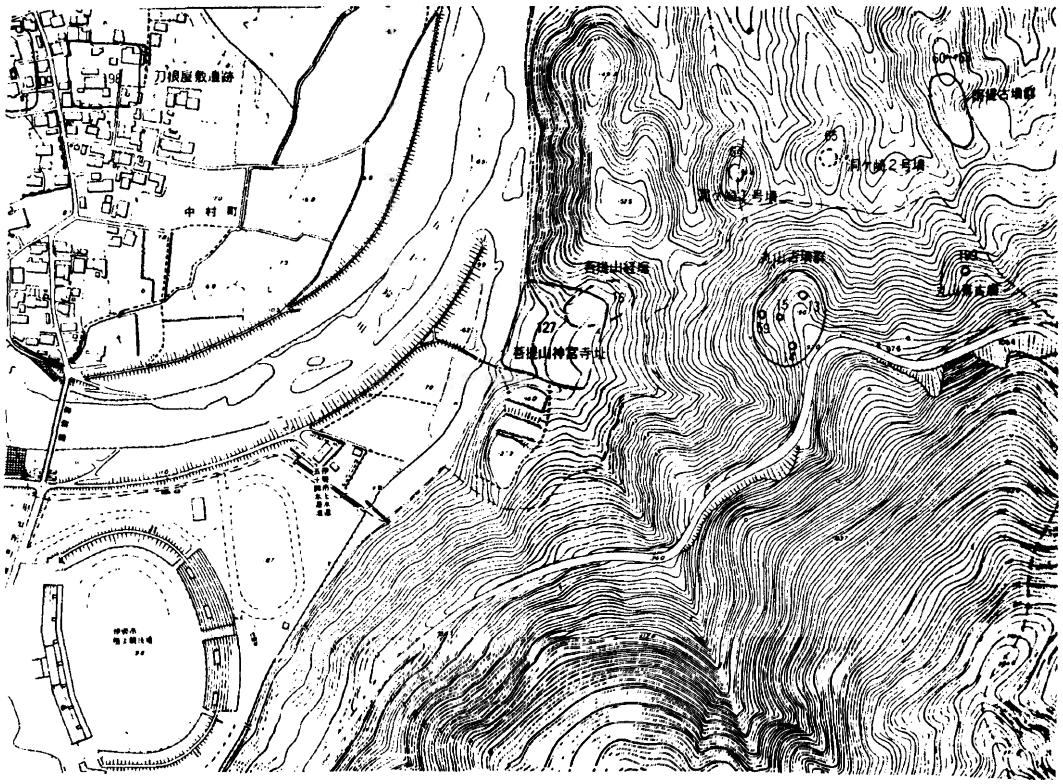
(2) 鈴鹿市史編さん室の仲見秀雄先生のご教示によると、地元の国府小学校に遺物と出土状態を描いた図があったが現在は失われているということである。先生よりいただいたコピーを掲げておく（第6図）。

2　伊勢市丸山古墳群

伊勢市域の東方にそびえる朝熊（あさま）山は、古来山岳信仰の霊地として知られ、その中腹には金剛證寺があり、また山頂には昭和三十四年の伊勢湾台風の直後に発見された朝熊山経塚群の存在することで有名である。

この朝熊山の西につながる岩井田山から北方に延びる標高五〇㍍の丘陵上に四基の古墳が分布し、「丸山古墳群」として『伊勢市文化財分布図』に掲載されている（第7図）。四基とも直径十㍍前後の円墳で横穴式石室を主体構造としている。伊勢志摩スカイラインが古墳群のすぐ上を通っていて見学に便利である。

一号墳は明治二十三年（一八九〇）に発掘され、その時に羨道部の石組がほとんど破壊され、現状では玄室のみがのこっている。二号墳は発掘年代・出土遺物共に不明であるが、直径十㍍の墳丘と片袖式の石室をのこしている。三号墳は大正四年（一九一五）に発掘された古墳で、墳丘は直径八・五㍍、石室は両袖式であるが奥壁を残してほとんど破壊されている。四号墳は新しく見つかったもので、直径八・四㍍、内部主体は不明である。この古墳群については、当時三重大学歴史研究会に所属されていた大西素行氏によって調査が行なわれ、地形測量・石室実測等



第7図　丸山古墳群の位置（『伊勢市文化財分布図』による）

によるくわしいデータが「伊勢市中村町丸山古墳群調査略報」として『ふびと』第二十一号（昭和三九年）にのせられている。また、石井昭郎氏の「丸山古墳群発掘記録の再見」と題するリポートが伊勢郷土会の機関誌『郷土史草』第六号（昭和四四年一〇月）に掲載されている。

当古墳群のうち一号墳は、明治二十三年に発掘され、出土遺物が現存している。また三号墳は大正四年に地元の人びとによって発掘されたが、その時の発見届と出土状況を示す絵図は、一、三号墳の出土遺物と共に、中村町公民館に伝えられている。二基分を合わせた出土遺物は、直刀・鏃など鉄製利器が三十余点、勾玉、管玉などの装身具が十点余、それに土師器と須恵器が七十余点に上る。大西素行氏の作成された一覧表が『ふびと』第二十一号にのせられているので掲げておく。なお、これらの出土遺物等は、一括して伊勢市の文化財に指定されている。

井上頼文教授とこの古墳群、さらに大正四年度の発掘・発見とのかかわりは、教授の居住地である宇治山田に近い場所でのことであり直接のつながりを知ることができる。「井上氏旧蔵資料」には、大正四年発見時の届書の控と思われるものがある。一通は「古墳発見届」で、山林所有者勝村秀太郎・田中友八の連名で、当時の宇治山田警察署長宛となっている。もう一通は「古墳調査」となっているが署名・宛先はない。伊勢市の中村公民館にのこされている当時の書類の中には、二通の「古墳発見ニ付調査ノ儀請願」と題した書類があり、石井昭郎氏によってすでに紹介されている

が、それと合わせて検討する必要がある。文面は次の通りである。

古墳発見届

本月三日岩井田山道路修繕中岩石取除ニ際シ
偶然古墳ヲ発見シ石廓中ヨリ左ノ古器物ヲ
収得致シ此条其位置及土俗傳説等ヲ具シ
此段及届出物也

発掘物

一　刀身　二本
一　鏃　六個
一　砥石　一個
一　水晶切子玉　一個
一　土器　二十一個
右三十一点

大正四年二月八日

度会郡四郷村大字北中村山林所有者
勝村秀太郎
田中友八

字治山田警察署長
警視　渡邊恒三郎殿

井上頼文教授と日本考古学

古墳調書

一　所在地　宇治山田市大字館町字岩井田山ノ尾嵜ナル
俗称丸山ノ内菩提山神宮寺旧趾ヲ距ル東方凡
四丁高凡百五十尺ノ地点ニアリテ山林ハ四郷村大字
北中村田中安次郎外八名ノ所有ニ属ス

一　形状　西面石廓長二十尺巾廣処四尺三寸
狭処三尺八寸高七尺入口長九尺巾二尺ヲ有シ十貫
乃至三十貫ノ岩石ニテ積立テ頂ニ蓋石ヲ置キ
土ヲ盛リタリ発堀(マヽ)内面ハ周囲ノ石積自然ニ崩レ
込ミテ狭窄ナリ

一　附近ノ状況　明治二十三年十月発見ノ古墳ハ新発見ノ
地点ヨリ東方十六間三尺ヲ距テ、頂上ニ東面シ
「ヨシツ穴」ト称スル古墳其南方十三間ヲ距テシ
低所ニアリテ新発見ノ古墳ヲ距ル東南六間二尺
ニ在リテ西面セリ尚新発見ノ古墳下ニ石段
ヲ設ケシトコロアリテ自ラ参道ノ趾ヲ存ス

一　古墳ニ関スル傳説　ヨシツ穴ノ発堀(マヽ)年代不詳ナルモ
明治二十三年十月発見ノ古墳ヨリハ瑪瑙勾玉一個

水晶切子玉二個碧玉岩管玉三個銀環六個
刀身断片数十卵形鐔一個土器数十ヲ収得
シ今現ニ北中村区會所ニ保管シタリ往古ヨリ
丸山ノ地ヲ倭姫命ノ御墳(ママ)ト称シ大田命ノ
御墳(ママ)地モ此ノ地域ニ並ヒ存セルナラント傳ヘ云ヘリ
此ノ東方ヲ姥ケ山ト呼ヒ山脚ヲ繞レル谿流ヲ姥
ケ谷ト称シ西方ヲ繞ル谿流ヲ曼荼羅谷

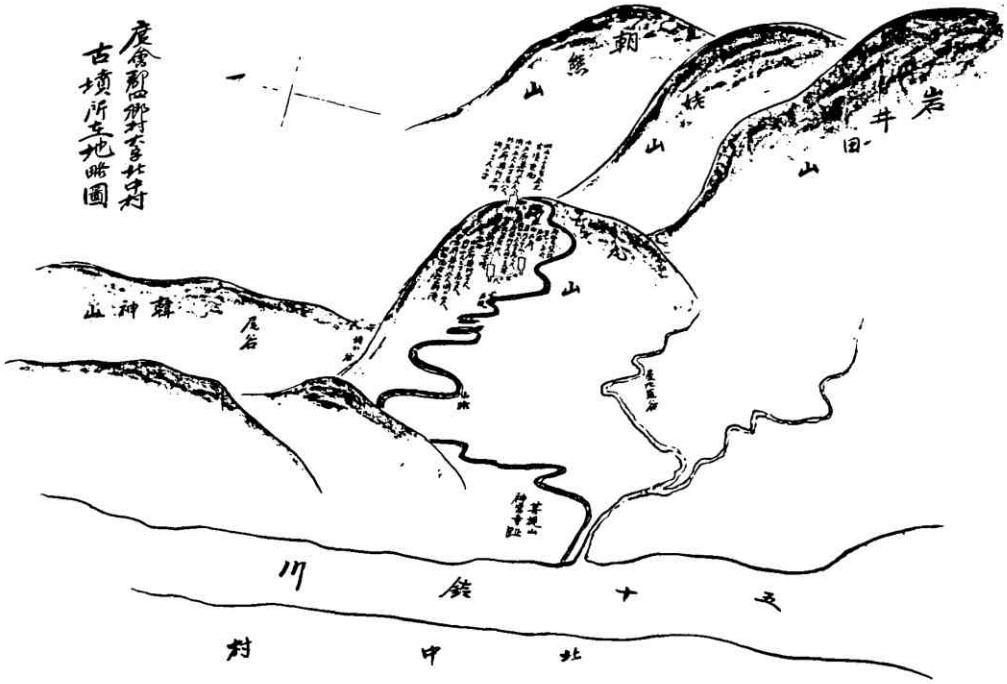
ト唱ヘ北方ニ起伏スル山脉ヲ韓神山ト称シ其谿間
ニ倭姫命ト共ニ天照皇太神ニ奉仕セシ荒木田
家ノ祖先ノ墳墓アリテ山宮祭場ノ旧址ヲ存ス
其倭姫命御墳(ママ)ナルベシト云フハ明治二十三年
十月発見セシ所ニシテ三ヵ所ノ内石材最モ巨大
ニ構造壮厳ヲ保チヨシツ穴ト称スルモ亦
之ニ亜キテ構造荘大ナリ

発見届の日付は大正四年の二月四日になっているが、それから日を隔てていない二月二十三日に、当時、神宮の祢宜の要職にあった頼文教授は、地元からの招聘によって「古墳尊重講話」と題して講演をされている。その要旨は石井昭郎氏の文にのせられているので引用させていただくことにしたい。この古墳の発掘・発見に関して、教授の所感と古墳調査についての心構えが述べられている。

古墳尊重講話

然して、祖先の墳塋の側に家族の墓を作り、以て幽冥に在る祖先を慰安するを孝道の一としたりき。現に、この菩提山丸山の古墳にて発見せし酒壺の如きは、祖先の嗜好に副ひて、死後も尚之を用ゐんことを信じ、砥石の如きは、携えたる刀剣鉾鏃等を磨く料にとて、不自由なき様具備せし等、総て祖先を尊崇し孝事せること此の如き也。……中略……

今回、発見せし古墳の形状、及「ヨシツネ穴」の壮大なる構造、及明治二十三年に発掘せし古器物に徴照すれば、当度発見せし古器物に不備の点あるを研究させるべからず。恐らくは、一度此の古墳を発掘して完全なる古器物を取出せし形跡を認め得らる。其一証としては、完全なるべき土器の破片のみにして大部分の存せざること。又一証としては、切子玉の只一個にして確に数個あるべき勾玉管玉の発見せられさりしこと、殊に石槨の崩壊せし状態が自然的ならざる様に見受けらるゝこと等なり。総てかかる古墳の形式と石槨内に陳列しある古器物の形状及陳列方は粗一定し居るものなるを以て、其時代等は一見推測するに難からざるも、如此石槨を崩壊しし槨内の古器物を破却せし後にては鑑証をなす



第9図　古墳所在地略図

副葬品 ＼ 古墳		1号墳 絵図	3号墳 古墳発見届	3号墳 絵図	出土古墳不明	総計
鉄製利器	直刀（大）		4			2以上
	〃（小）					2以上
	鏃	1				1
	刀子					8
	鎌（広細片刀）	4	6			10以上
	鉞（推定）				1	1
	のみ				1	1
	砥石		1	1		(1)
装身具	曲玉	1				1
	管玉	3				3
	切子玉	2	1			3
	銀環	6				6
土師器	高杯	2		2		2＋(2)
	その他				破片	若干
須恵器	坏（身）	8				26
	同（蓋）	3				21
	有蓋高坏(身)			3	2	5
	同（蓋）					
	無蓋高坏(1)		2	2		1＋(1)
	〃 (2)		1	1		1
	短頸壺(身)	1				1
	同（蓋）	1				1
	細口壺		1	1		1
	広口壺	1				1
	甕		2	2		4
	提瓶	3	5	5		8

丸山古墳群の出土遺物

第10図　丸山古墳群の出土遺物

に困難なれば、爾来、若し古墳と覚しき所を掘り当てなば、毫も濫りに発掘せず、其筋の指揮を仰きて其処置を施し、十分に郷土祖神の終焉地を研究して祭祀の道を尽し、古墳に対しては慎重に敬意を捧げて追孝の大儀を琢すべき也（大正四年二月二三日、四郷村北中村区会所での講話を『参宮新報』の記者が要約したもの）。

この講演のあと、三月二日付で北中村区長田中安次郎から賴文教授に宛てた書簡がある。文面は次の通りであるが、講演に対する謝礼を述べ、教授より依頼のあった古器物の図面を送付する旨が記されており、二枚の図が同封されている。この図は、現在伊勢市にのこされているものと同じであるが、出土遺物のすべてを実物大で描き彩色が施されている（第9・10図）。

謹啓過日古墳ニ対シては御多忙中態々御踏査ニ
預り而も有益なる御講演ニ相成有り難く区民
一仝奉萬謝候　偖去日川原様ニ面談仕候處
御貴殿ニ古器物図面御入用之趣承リ候ニ付爰ニ
一部送付仕候間御収納被下度先ハ御礼旁
如斯　御座候早々

三月二日　北中村区長　田中安次郎

井上賴文殿

3　伊勢市小町塚経塚と出土瓦経

「井上氏旧蔵資料」のうち、考古資料として取扱っている現物として四点の瓦経片がある。これだけは例外的に出土地が明記されていないが、そのうちの一点が梵文であることと、経文の字体から見て伊勢小町塚経塚出土の瓦経片であろうと判断した。「井上氏旧蔵資料」の中には、別に瓦経片ばかりの四綴の拓本集がある。その一綴には、現在東京国立博物館の所蔵となり、国の重要文化財に指定されている陶製仏像光背の拓本がふくまれていることから、この拓本集も間違いなく小町塚経塚出土の瓦経であることが明らかである。

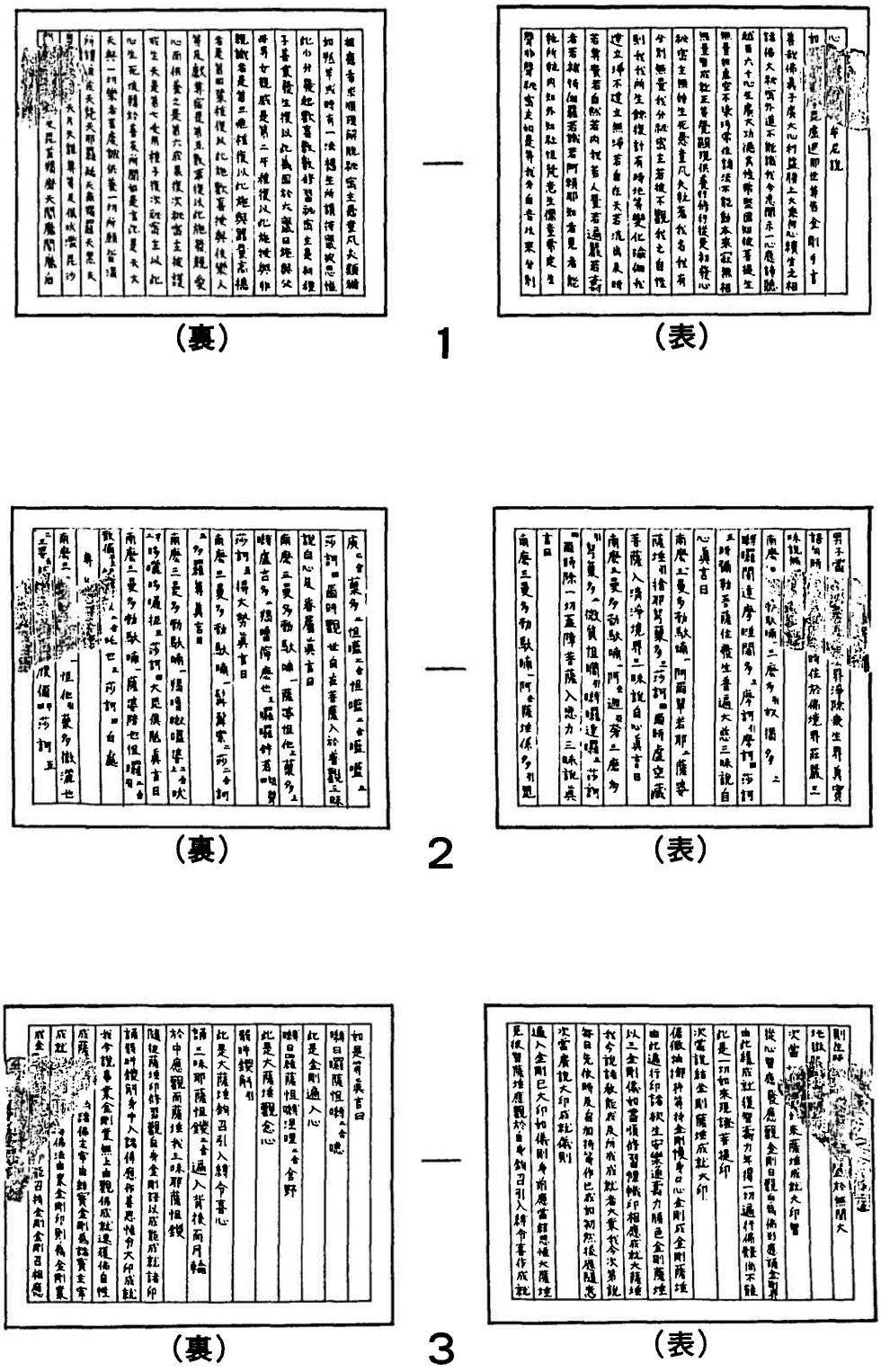
四綴とも美濃半紙を使用し、破片一つ一つについて表裏両面とも丁寧に手拓されているが、各綴の中にふくまれている瓦経片の数は次の通りである（各綴の番号は仮につけたもの）。

綴＼種類	瓦経片	曼荼羅片	陶製光背	陶製台座	備考
第一綴	一五八	二	二	—	
第二綴	一一五	—	—	—	
第三綴	八三	—	一	一	「法楽舎」所刻瓦の拓本 射和文庫の朱印
第四綴	一四	一	二	—	伊勢国分寺跡の軒丸瓦 江戸時代般若心経所刻平瓦
計	三七〇	三	五	一	

これを合計すると三七〇点となり、かなりの量であることがわかる。因みに件の陶製仏像光背と台座の拓本は第二・三綴の中におさめられている。また、第三綴の中には、「射和文庫」[1]の朱印が押捺されている。これらの拓本が、いつ、どこで手拓されたのかは年月日・場所についての記載がないので知ることのできないのが残念である。

伊勢小町塚経塚は、現在の伊勢市浦口町三丁目の小丘上に所在したが、明治時代にこの小丘の一帯が墓地として開かれた際に、瓦経をはじめとする夥しい遺物が出土したと伝えられている。この瓦経出土地は、当時から多くの人びとの注意に上り、小町塚経塚ならびにその出土遺物についての文献は数多い。[2]現在ではこの出土遺物は随所に散らばって所蔵されていて、埋納状態と共に出土遺物の総数もまったく把握できない状態である。

「井上氏旧蔵資料」の拓本集は、場合によっては出土当時に、まだ遺物が一括してどこかに保管されていたものを、おそらく井上頼文教授ご自身が手拓されている可能性が大きい。とすると、この拓本集に収められている瓦経片一つ一つを、現存するものと対比することによって、ある程度発見・出土当時の実数を復原することができるかも知れない。[3]



第11図　小町塚経塚出土瓦経の復原図

この小町塚経塚の出土遺物については、とくに陶製仏像光背に刻まれている銘文を素材として、その生産地、生産の背景について考察を加えた私の一文があるので参照されたい。(4)

ここでは、石田慶子さんが卒業論文の資料として、拓本集の瓦経片のうち経典のわかるものについて『國譯大藏經』所収の原典と対比して作成した復原図の一部を掲げておく（第11図）。

図版番号	所収綴	経典
第11図 1	第一綴	大日経 一巻—四
〃 2	〃	大日経 二巻—十一
〃 3	〃	金剛頂経 下—七

注

(1) 射和文庫は、現在の三重県松阪市射和（いざわ）町出身の竹川竹齋（一八〇九～八二）が開設した文庫で、嘉永七年（一八五四）ごろの完成という。現在もご子孫によって保存されている。

(2) 小町塚経塚の文献については、神宮司庁に勤務されている和田年弥氏の「伊勢小町塚経塚の研究」（『三重考古』第三号、昭和五五年五月）に網羅されている。

(3) 和田年弥氏のご教示による。

(4) 藤井直正「歴史時代考古学の視点(二)」（『大手前女子大学論集』第一六号、昭和五七年一一月）

五　あとがき

以上、「井上氏旧蔵資料」の中にのこされている井上頼文教授関係の資料を通じて、伊勢国古代遺跡研究に尽くされた業績を概観すると共に、それに関係のある文献を紹介した。紙数の都合もあって、今回は教授の略伝と教授の懐かれていた考古学の定義をかえり見ること、実際の遺跡

としては、鈴鹿市と伊勢市に所在する古墳とその遺物、伊勢市の小町塚経塚の三ヵ所に止まったが、全体の上からは何分の一かに過ぎない。それらについては、さらに資料の検討と現地調査を加えて後日を期すことにしたい。

最後になったが、昭和五十三年刊行の『三重の遺跡』(昭和五三年度日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会編)所載の文献目録から、井上頼文教授がかつて学界誌に発表されている論文・報告を摘記しておく。

標題	掲載誌	発行年
伊勢国鈴鹿郡玉垣村の古墳	考古界 七―三	明治四一年
伊勢国員弁郡千草村付近の古墳	考古学雑誌 一―四	〃 四三年
伊勢国飯南郡西大掛村の石槨	東京人類学会雑誌 二九八	〃 四四年
伊勢国斉宮村発見の瑞	考古学雑誌 一―七	〃
伊勢大仏山及佐田山発掘の遺物	〃 四―三	大正 二年
多度山麓発見の古鏡	〃 四―一	〃 一二年

本稿を作成することができたのは、資料の自由な使用と発表を許していただくことができたからであり、それは大手前女子短期大学佐藤直市教授のご厚意の賜物である。また、現地調査に当たっては、三重県教育委員会文化課の小玉道明係長以下、伊藤久嗣・倉田直純・駒田利治・谷本鋭次・新田　洋・山沢義貴の諸氏、鈴鹿市史編さん室の仲見秀雄氏、四日市市教育委員会の北野　保氏、伊勢市教育委員会の岩中淳之氏、神宮司庁の和田年弥氏ら、伊勢在住・在勤の考古学・文化財関係者のお世話になり懇切な助言を得た。

なお、本稿のベースになっているのは史学科十五期生岩谷奈津子さんの卒業論文であり、史料の筆写、現地調査、文献の収集に当たってもその労に負うところが大きい。

これら各氏のご芳情に対し、記して深甚の感謝の意を表したいと思う。